調和の教育

——ロックの教育観——

井　上　和　幸

はじめに
1. ロックとその教育思想について
2. 身体の健康について　—体育論—
3. 精神の健康について　—徳育論—
4. 学習の方法について　—知育論—
5. 諸芸一般について　—技能論—

はじめに

創立十周年を迎えた本学は，教育方針として「知徳体一体の教育」を標榜してきた。

本学学長の言にもあるように「教育の本義は古今東西いずれの国においても，これを集約して表現すれば，『知徳体』教育という，平凡にして非凡な語につきると考える」と。

たしかに，教育は人間の形成，人格の完成を第一義として，特に調和的な人間，民主的な社会人，理性的，創造的人格の育成を目的としてきた。特に調和的な人間の形成は，古代ギリシャのイオニア族（アテネ）以来の伝統をもつものであり，中世のキリスト教教育時代に於ては一旦後退したものであったが，ルネッサンス期に於て復活し，近代の市民社会形成期に啓蒙思想，新教運動，実学主義の抬頭と相俟って教育思想の中核となり，16世紀以降になると調和的な人間形成のカリキュラムや具体的な実践方法（教育方法）が，更には指導者

としての教師の資質やら教師の選択方法にいたるまで論じた教育論が構想されるようになった。

そこで本稿では，これら知徳体教育を「調和の教育」と呼称して，その代表的な思想である。J. Locke の教育論（管見）[1] を中心にしながら，調和の教育の源流を考察してゆきたいと思う。

ロックの教育論は，一般にはイギリス上流社会の紳士教育を説いたものであり，学校教育には批判を加えたものであるから，現代においては，彼を有名にした認識論[2] や政治論[3]，或は自然法思想ほど評価をされてはいない。

だが，教育の崩壊，家庭教育の喪失といわれる今日に於ては，再点検をしなければならない著作であると信じる。

紳士教育，上流階級の子弟のための教育という面からのみとらえがたいものもあり，彼もその著物の中で述べているように，[4] 昔からの習慣にしたがうよりも，自分の理性に訴えて子どもの教育を行ってみたいと考えている人のために書いているのである。

だから，一般人，市民に適用できる部分も多く，300年近くを経過した今日においても光を放つ教育論ということができる。

まして，「人間悟性論」の考え方を追求してゆけば，人間のための悟性（知性）認識論であり，感覚的心理主義に立脚した「悟性指導のあり方」は階級を超越した人間（市民）のための思想ということができよう。

拡大解釈という批判は免れないかも知れないが，啓蒙思想家としての著者の立場を考慮するならば，教育論も一書簡集の管見たる領域を超えて，幸福を追

注(1) 正式には『Some Thoughts concerning Education』（1963）のことであるが，もともとロックの友人 Eduward Clark へあてた書簡を後日編集したものであるから，自分の意見という意味から「管見」とよばれている。邦訳されたものには次のものがある。『教育に関する考察』押村襄，玉川大出版 1953. 同，服部知文，岩波文庫 1967. 『教育論』梅崎光生，明治図書1960.

(2) 『An Essay concerning Understanding』（1690）『人間悟性論』加藤卯一郎，岩波文庫等がある。

(3) 『Two Treaties of Government 』（1690）『政治論』松浦嘉一・浜林正夫ほかの訳書がある。

(4) Locke ; Some Thoughts concerning Education : Sect. 216,

求する理性的な人間の形成観として把握できるのではないだろうか。

その面から教育観をとらえてみたい。

1. ロックとその教育思想について

ロックは，17世紀のイギリス人で，絶対主義が崩壊して初期の市民社会が形成されつつあった時代の人であった。

当時は啓蒙思想の萠芽期で，理性を自然の観念に照らして権威と伝統を厳しく批判し，科学的知識の普及によって現世的幸福の達成をはかろうとしたものであった。(1)

ロックは，この啓蒙時代の先駆者であり，啓蒙思想の指導者の一人でもある。

また彼は，哲学の分野からながめると，認識論の始祖であり，イギリス経験論の大成者である。それは，彼がスコラ哲学の空虚な論争に反対して市民社会の具体的経験的な市民的人間の悟性能力の自己吟味，つまり，我々の認識の起源，確実性および範囲を研究する認識批判が，一切の形而上学的研究に先行すべきことを説いたからである。(2)

更に彼は，政治社会の分野では「名誉革命」を成功させ，イギリス立憲君主制を頂点とする近代市民社会の理論を打ち出し，経済では，イングランド銀行設立に寄与，アダム・スミス（Adam Smith, 1723—1790）が現われるまで，貿易差額論を唱え正統派重商主義者として君臨し，宗教では，寛容の闘士としてキリスト教の合理性を企て，理神論の開拓者の役割を果している。

このようにロックは多方面に渡って活躍し，後世に大きな影響を与えた人である。著作も多く，主著とされる「人間悟性論」（An Essay concerning Human Understanding, 1690）では，生得観念の存在を否定し，人間精神

注(1)　矢田俊隆『近代思想史Ⅲ』（弘文堂）「啓蒙の社会的基盤」の項　p. 63.

(2)　J. Locke ; An Essay concerning Human Understanding (Erermans Library) p. 5 .

の白紙（tabula rasa）[3] なることを強調して，認識の根源を経験にもとめ，「悟性の指導」（Of the Conduct of Understanding, 1677）では，「悟性論」の理論を実際化して形式陶冶を展開し，「政治論」（Two Treatises of Government, 1690）においては，人間存在の根本を自然状態に求め，契約にもとづく政府の組織化を説いて民主主義的政治理念を基礎づけ，「教育論」（Some Thoughts concerning Education, 1963）の中では，イギリス紳士の実際教育に偉大な影響を与えている。

彼の思想は多様性に富んでいるが，経験主義の特色は社会的には宗教的寛容個人的自由，開かれた社会へと向うことであり，それに基く政治論は民主主義的傾向への発展を意味するものである。

ロックの説く民主主義は保守的で寡頭政治的であって，この点において，彼が紳士階級の教育を理想としていることも理解されるのである。

そして彼の個性尊重の教育理論は，名誉革命後の時代の，新しい担い手を育成することがねらいとなって，教育の目的を，子どもの自然的素質を促進し発展させること，個性の完成においている。

したがって，旧来のスコラ的な知識の詰め込み教育を排除して，子どもの自主独立性と社会的有能性を強調し，身体的有能性と道徳的性格の育成を重視しているのである。

子どもは，学者になるのではなく，市民社会の価値ある一人とならなければならないのであって，教育訓練に当っては，ただ一人の有能な教師の手に委ねられ，個人教授の形式の中にあるときはじめてそれが達成されるのである。

彼がイギリス紳士を教育の理想として考えたのも「教育論」のエドワード・クラークへの献辞の中で述べているように，始めに上流階級の人々が教育によって向上するならば，下層の人々も教化されるであろうと信じていた結果なのである。[4]

注(3)　Ibib.，p.77. tabula rasaは，白くけずられた板の意味もある。

(4)　J. Locke ; Some Thoughts concerning Education.
(F. W. Garaforth : Barron's Series, 1964) p.23.

彼の教育についての考え方は，過去の教育思想家と比較すると大きな相異点がみられる。独善的な部分も多く後代に於て批判を加えられているが，まず特色としてあげられるのは学校教育への強い反対である 。

その理由として，学校教育はあらゆる階層の子どもたちが集って行われるので，一枚の白紙か（white paper），蜜蠟（wax）にすぎない子どもは，まわりの人の考えや行動に左右され，正しい方向に形成されるより，むしろ悪感化がなされるので道徳心の育成に不適当であり，教育方法が拙劣であると指摘している。

このことは，古典偏重主義教育への強い不満と笞による学習方法への反発である。

二番目の特色としては，理性の尊重ということであろう。「健全なる身体に宿る健全なる精神」の引用[5] から心身の調和的発展を理想とし，身体や精神が，理性の命ずるままに従って欲望や誘惑にうちかって強くなることを願っている事である。

三番目の特色としては，期待される人間像とも云えるイギリス紳士像を明確に打出して紳士のそなえるべき条件を四つかかげ，その条件の獲得に向わせるよう指導している点である。

要約すれば，イギリス紳士を理想とした家庭教師による合理的，現実的，個人主義的教育論であり，その中を貫くものは，不合理な習慣を打破し，理性の使用によって現実の幸福を獲得しようとする啓蒙の思想である。

したがって，合理主義的，個人主義的立場からの教育の意味を考え，精神的肉体的素質の自然的発展をなす教育ということができる。

ロックは教育史の立場から考察すると，実学主義の系譜に属する一人である。

実学主義は，17世紀の初頭に抬頭した思想で，16世紀の人文主義が，古典の言語形式に執着する言語主義に堕したのに対し，内容を尊重し事物に即する真

注(5)　Ibid.,p.25,有名な“a sound mind in a sound body”

の実在の追求から興ってきたのである。帰納法の確立がなされ，この新しい科学的研究法が教育の分野でも採用され画期的な進歩の段階に入っていった。

ロックはベーコン（F. Bacon, 1561—1626）の思想の流れを吸収し，深く影響されている。

特に知識の基礎として感覚を重視して，観念の起源を感覚経験に求め，経験観念と内省によって観念の結合をなし，習慣の形成論に発展させた如く，感覚に基く教育方法を考えている。感覚的実学主義者ということができる。

でも，コメニウス（J. A. Comenius, 1592—1670）のように組織的方法によって教育の原則をとり入れることはしていない。[6] コメニウスやラトケ（W. Ratke, 1571—1635）は客観世界における自然を基礎として，自然の秩序にしたがって秩序的に教育すべきとするのであるが，ロックはルソー（J. J. Rousseau, 1712—1718）と同様に主観の中にある自然の本能を自然のままに発達させようという傾向があり，悟性の指導にすべてをゆだねているのである。

それでも，彼の教育思想ないし方法は実学的であり，母国語の重視に始り，外国語の会話による修得に関連させて，風俗，習慣，歴史等も合せて学習させようとするのは，実学主義者ならではの観がある。

ロックを社会的実学主義者とみる立場もある。それは代表者であるモンテーニュ（M. Montaigne, 1572—1592）が，教育の目的を心身の調和した紳士におき，従来軽視されていた体育を強調し訓練の仕方としては，厳しさよりもおだやかさを採り，教育の内容・方法において，知らない土地を訪れ，多くの人々と交り，観察や見聞を広めることにおいたからである。[7] 名著「随想録」（Essais de Messire Michel, 1580）の中に述べられた教育論をロックが引用して後述する「教育に関する考察」を作成したことからもうかがえるし，

注(6)　岩田朝一『ロック教育思想の研究』（理想社）p. 152，参照。

(7)　F. J. Billeskov Jansen ; Sources vives de la pensee de Montaigne, etude sur les fondements psychologiques et biographigues des Essais.
佐藤輝夫訳『現代人モンテーニュ』1946，p. p. 35—36参照。

両者は教育観のみならず実生活においても類似した点がみうけられる。

もう一人，ロックの教育論に影響を与えたとみられる人物にミルトン（J. Milton 1608—1674）がいる。彼は人文的実学主義者であるけれども「教育論」（Tractate on Education, 1644）の中で教育の目的は，神を知り，神の如くならせることとし，神を知るには神の造った万物を知ることが必要であり，神の如くなるには正しい道徳心と信仰を得ることであると述べている。ミルトンの道徳の根本は自由である。

教育の目的論において多少の違いがみられるが，方法論において感覚的直観による知識を優先させ自由な方法を説いている点では，ロックの先駆者ともいえる。

ロックの実学主義的教育思想を綴った「教育に関する考察」は1693年6月に出版された。

すぐには大きな反響を呼ばなかったらしいが，彼の友人の間で問題とされ，その子どもたちの教育に応用されていき，次第に一般市民の間に拡がっていったようである。

特に中流以上の家庭においては，この書物に従って教育が忠実に履行され，新しい時代のイギリス紳士登場の基盤をなしたということである。

彼の紳士教育論は，前記したように独創的な見解ではなかったが，過去のものを集大成して完成させた点に意義が認められる。

イギリス人は空理空論に満足せず，実践を重要視する民族であり，経験論を生むべくして生んだ国である。経験論こそ生活の哲学であり，経験をもとにしたロックの教育論こそ彼等の人間形成論となったのである。

家庭中心主義の教育も，その民族の思想の基盤に家庭は他からの干渉を排除する「城」意識が存在しているからこそ合致したのであろう。清教徒が母国をはなれアメリカ大陸へ移住した後にも，ロックの教育論は愛読され実践されている。

彼の精神と身体の調和的な発達をめざす鍛練主義は，家庭のみならずパブリ

ック・スクールの教育にとり入れられ全寮制による人間的接触に重点が置かれたと云われている。[8]

その他，心理的基礎に立脚して，伝統的注入主義的教育方法を排除し，経験を重んじながら子どもの興味と自由性に適応した実科的教育方法を採ったことで，学校教育の方法を大きく改革する原動力となったのである。

以下，彼の「教育に関する考察」について四つの部門からながめてみたいと思う。

2. 身体の健康について　―体育論―

「教育に関する考察」（Some Thoughts concerning Education）の冒頭において，健全なる身体に宿る健全なる精神という状態が，人間にとって最も幸福な状態であると力説し，身体の健康なくして幸福はあり得ないと述べている。[1]

彼は伝記によると幼少の頃より身体は病弱であったらしく，その体験から身体の健康維持を最初にもってきたのかも知れない。しかし，彼は学生時代に医学を専攻していた事実[2]もあり，経験のみでなく科学的立場から実証しようと試みている。

すなわち，精神の健康を期そうと考えてもその価値評価をなす知識及び経験は正常に機能する感覚器官等によって獲得され，身体諸器官・諸組織によって表現され，判断されなければならない。精神が命令するとおり遂行できる丈夫で活力ある身体づくりが先決であり，理性的動物にふさわしい正しい精神づくりよりも先に掲げている点からも理解できる。

注(8)　岩田朝一，前掲書p. 153. 参照。

(1)　J. Locke ; Some Thoughts concerning Education,
(H. R. Peniman. D. Van Nostrand Co) Sect. 1，節は原著書のもの。

(2)　大槻春彦『ロック』（牧書店）p. 32，現存するロックのノート・ブックに1652年度医学関係のことが書きこまれているし，更には1666年 Oxford Univ. に戻り医学と科学実験に励むとある。P. 51　平野耿『ジョン・ロック研究』（御茶の水書房）の年譜欄にも1666年同様の記載あり。

更には，人間の発達過程を生理学的に検討して，知性の発達は幼児期には極めて少ないので，知性発達の段階までは，準備として身体の健康に留意し，正しい生活習慣，健康維持の習慣形成が大切であることを説いている。

彼の身体の健康に関する見解は，子どもの親たちに鋭く向けられ，過度の甘やかしと可愛がりのために子どもの体質が駄目にされたり又は損なわれているという注意から始まっている。(3) 300年前の上流家庭の両親への注意であるが現代の両親への警告といえないこともない。身体の健康維持は，病気の子や虚弱な子に対して医者が施すような方法ではなく，より積極的に体質を維持し改善するやり方でなければ意味がなく，「正直な小作人や裕福な自作農夫が子どもを取扱うようにあつかえ」(4) と原則を示している。自然のままの原則として提案しているようであるが，具体的な方法を検討してみると，鍛練主義にもとづく健康管理ということができる。

第一に注意すべき事として，衣服について触れており，「夏冬を通じて，あまり厚着をさせてはならない」(5) ということである。

ここで彼が強調している事は，顔の例をもち出して，身体も顔と同様に絶えず使っておれば寒暖に耐えうるものであり，最初から慣らしておけば人間の素質も改善できるという確信である。

同様な理由から，子どもが頭髪に覆れたならば日中帽子なしでかけまわれるように訓練すべきで，寝帽はかぶらせるのは悪い習慣で，頭を暖くしておくと頭痛，風邪，カタル，咳およびその他の病気にかかりやすくなるおそれがあると警告している。(6)

更には，子どもの足を毎日冷水で洗うようにすすめている。手と同じように

注(3) J. Locke ; Some Thoughts concerning Edcation. Sect. 4
押村襄訳『教育に関する考察』玉川大学出版　p. 22。以下原著書とこの訳文による引用訳文は多少変更した箇所もある。原著の節は Sect. 4，邦訳はp. 22のように略記する。

(4) Ibid., Sect. 4 p. 21. 当時の上流階級の婦人達へのきびしい忠告と考えられる。

(5) Ibid., Sect. 5., p. 22.

(6) Ibid., headaches, colds, catarrhs, coughs, several other diseasis.

湿気に慣れさせ，絶えず清潔と健康のために心がけさせる必要からの提案である。面白いことに「水たまりに近づくと，水が出入りする目の粗い靴を造らせる」[7] ことを提唱している。これも母親たちのわが子への甘やかしを多少皮肉った提唱でもあろうが，前記した習慣形成の一方法としての理由からである。冷水で毎日足を洗うことはウオノメの予防にもなるということまで付記している。

方法としては，最初は春に生ぬるい水から始め次第に冷たくし，2，3日で完全な冷水を使うようにし，冬も夏も継続して行うのがよいと。

このように変化は少しづつしか感じられない位にしながら行うべきで，日常生活における身体の鍛練の方法も同様でなければならないと説いている。

続いて水泳について触れ，適当な年令になり，教える人があらわれればそれで良しとし，人命救助と健康の増進のために推奨している。しかし，ロックは医学を研究した人でもあるため，「激しい運動の後身体が温まった時，あるいは血行や脈搏が興奮の状態にあるときなどは，決して水に入ってはならない」[8] と注意を与えている。

続いて，出来るだけ外気にふれさせ，冬でもなるべく火のそばに近づけないようにして寒暑，日光及び風雨に耐えられる身体の育成を説いている。

しかし，ここにおいても一つの注意を述べ「走り廻って身体が熱くなったときは，決して冷い地面に坐ったり，横になったり，或は冷い飲物をとったりしない事が必要である。」[9]

また，外で遊ぶ少女の衣服についても細かい感覚を示して，衣服は広くて身体の自然の発育及び運動を妨げないものを用い，ほっそりした腰や上品な容姿に仕立てるために着せる窮屈な衣服は，身体の多くの器官で準備された栄養物や血行の配合を悪くして，狭い胸，悪臭のある息，肺病，せむし等を生じさせ

注(7) Ibid., Sect. 7, p.24. 婦人達の反対を予想している。

(8) Ibid., Sect. 8, p.28.

(9) Ibid., Sect. 10, p.29. 熱病（fevers）や他の病気の予防のためである。

る結果になるので有害であるときめつけている。[10]

飲食物については，あっさりしたもの，簡単なものをとるようにすべきであり，特に2，3才になるまでは肉類は食べさせない方が良いとし，その理由としては「3，4才までにまったく肉類をとらないならば子どもの歯は，はるかに危険なく育ち，小さい間に病気にかかることもなく，更に一層確実に健康な丈夫な体質の基礎をきずくことになる」と述べている。[11]

しかし，どうしても肉類をとる必要があるなら一日に一回だけ，それも一種類だけとし，充分に噛むこと。

調理に関しては，砂糖，塩を控え目にすること。薬味の不使用等。厳しい制限を用い，食事の時間に関しては反対に「あまり手数でない限り，一定の時間を定めないのが最も良いと思う」なぜなら一定の時間がたつと食事する習慣が子どもの意志にかかわらず胃が食物を欲するようになってしまい，時間が遅れると気むづかしくさせるか，食べすぎて苦しんだり，食欲がなくなって元気がなくなったりする」[12] として，毎日時間をかえて行うべきだとこれも通常と異なる提案を行っている。

飲み物については，自然の渇き以上には決して水分をとらないことを原則として，子どもには，ぶどう酒等は決して飲ませてはいけないと。水を飲ませることについても細心の注意を払い，暑い時に多量の水を飲みすぎるために熱病や胃病を併発するおそれのあることを例証し，がまんをすること説いている。[14] がまんすることは身体の健康のみならず，精神の健康のためにも最も価値ある習慣であると説き，彼の鍛練主義の基本をここに打ち出している。

暑い時は決して水分とってはいけないが，パン等を多量に食べた後で体温と

注(10) Ibid., Sect. 12, narrow breasts, short and stinking breath, ill lungs crookedness

(11) Ibid., Sect. 13, p. 32.

(12) Ibid., Sect. 14, p. 33.

(13) Ibid., Sect. 15. p. 35.

(14) Ibib., Sect. 17, 但しsmall beerは良いとしている。

同じ程度の温い飲みものであれば差支えないと。

一見，矛盾しているようだが，これは子どもの渇きがひどいときの例外的方法とみるべきであろう。

ロックの身体の健康，精神の健康に関する数多くの提言は，良き習慣の形成に向けられており，それを貫くものは克己主義であると云えよう。厳格なまでに制限が加えられているが，次に述べる睡眠時間については，子どもの欲求どおり，子どもが満足するまで許している。その理由は，成長発育に睡眠そのものの重要さを認識していたからであろう。

しかし，無制限に認めているわけではない。「7才以上14才くらいの間の適当な時期に，子どもがあまり寝床にいることを楽しみすぎるようであれば，次第に8時間くらいに減らしても良いのではないかと思う」[15] として子どもの性質や体力などを考慮にいれながら妥当な時間を考えている。

彼は身体の健康のために早寝早起きを習慣づける事をあげ，幼い時から，このような習慣づけが出来ている人は，成人してからも，人生の最良の働き盛りの時期にうとうと横になって浪費するようなことはないであろうし，更にはめったに大きな罪も犯さないとその効用を説いている。[16]

早起きの習慣形成の適切な方法として，毎朝子どもを起床させる場合，あわてて起したり，金切り声等を出して起してはならないと。突然，睡眠を破られると不機嫌になるだけでなく心まで傷つけられる可能性もあり，静かに呼びかけ，やさしい動作ではじめ次第に眠りからさまさせ，子どもが完全に正気にもどるまで，やさしい言葉かけ，やさしい取扱いが大切であると述べている。

現代のスピード時代からみると，何とも優雅な朝の風景の如くみえるが，ともすれば，現代の母親が忘れつつある習慣形成の原点といえるものがここにみられる。特に共働きの家庭においては，朝，時刻に追われる生活の中で，このロックの方法が実践されているとは言い難いのではなかろうか？

睡眠の際の寝具についても，やわらかい羽根ぶとんより綿入り刺子の方がよ

注(15) Ibid., Sect. 21, p. 42.
(16) Ibid., p. 41.

く，堅い寝台の方が体を丈夫にし，柔軟な寝台は体を虚弱にし疾病の原因になることを忠告している。[17] 鍛練主義の明確な提示であり，外泊の際にも熟睡できるよう，日頃より寝具，寝台に工夫と変化を与えるよう配慮している。

ロックは旅行を教育の仕あげとして（後述）掲げている点からも，旅先で，環境がかわり睡眠がとれないということは不幸なことであり，自然の偉大な強壮剤を活用しないことにもなるので，それを幼少の頃からの習慣づけることによって成就させたい願っている。

睡眠と同様健康に重大な影響を与えるものとして，規則正しい便通の習慣をあげ，便通は腸の蠕動運動の結果であるのでこのように完全に意志的でない運動もたえず習慣づけることによって可能になるのではなかろうかと考えて，朝食後，必ず必要な場所（nessesary house）へ行くように仕向けることが必要で，便通を習慣化することは子どもの健康にとって極めて大切なことであるとしている。[18]

身体の健康の最後の項目にロックは，「病気の予防のためには子どもにはどんな薬も決して与えないという規則を厳守すること」[19] をあげて，更には，あわてて医者を呼ぶこともいけないとしている。

まったく自然のままに放っておくほうがずっと安全であり，子どものかよわい身体は，できるだけそのままにしておき，絶対に必要とされる以外は手をつけないのがよいと主張している。どうしても普通の扱いで処理できない場合は，この時こそ，まじめで思慮深い医者の助言を求める必要があると。

以上のようにロックの身体の健康についての教育，つまり体育論は，要約すれば，戸外の空気に親しむこと，運動，睡眠，質素な食物の摂取，酒類や強い飲物の禁止，薬の不便用，厚着及び窮屈な衣類を着用させないこと。頭と足を冷たくし，足はふだんより冷水で洗わせること等になる。[20]

注(17) Ibid., Sect. 22,

(18) Ibid., Sect. 24, p. 45. peristaltic motion of the guts.（腸の蠕動運動）

(19) Ibid., Sect. 29, p. 49.

(20) Ibid., Sect. 30,

彼の体育論は訓練にもとづくもので克己主義が支配している。

3. 精神の健康について —徳育論—

彼によれば，道徳は，すべての人の所有しなければならないもののうちの一番目にあたるものであり，最も必要な天賦の資質であるといっている。特に紳士の教育にとって道徳こそ主要なもので，知識の獲得などは本来的な価値をもつものでないと軽視し，紳士の条件[1]の価値の順序づけにおいても，最初に徳性（virture）を持ってきている事からも理解することができる。

この徳性は必ずしも高邁なものだけとは限らず，実践的道徳，つまり日常生活の中での良き習慣，良きしつけを重要視している 。

この徳育論は，身体の健康に関するものとその主義が同じであり，厳しい訓練，習慣づけが説かれている。

彼は精神について「身体が精神の命ずるところに従いその任務を果せるように，身体を丈夫に活発にするための適切な配慮ができたら，その次に教育の主要な仕事は，精神を正しくすること，すなわち如何なる場合にも理性ある被造物の尊厳と優越とにふさわしい事柄の他は何ものにも同意を肯んじない精神をつくることである」[2]と身体の健康と関連させて論じており「身体の強健とは主として諸々の困難に耐えることであるが，精神の強健とは又同じことである。……人が自分自身の傾向性に抗して自分自身の願望を否定しうること。……理性が最善のものとして指示するところに純粋に従いうるということ」[3]として幼少期より理性的に物事を処理する習慣を養い，欲望の誘惑にうち勝つ意志の鍛練の必要を説いている。

一般の人々は，子どもを可愛がるために子どもの欠点を軽視して，道理をは

注(1) J. Locks ; Some Thoughts concerning Education, Sect. 134,
押村襄『教育に関する考察』 p. 221. 紳士の備うべきものとして徳性，知恵，正しい礼儀，知識の四つをあげている。

(2) Ibid., Sect. 31, p. 51.

(3) Ibid., Sect. 33, p. 52.

ずれたいたづらをしていても大目にみている場合があるが，子どもが成人した場合にその欠点を修正することが容易でなく，特に自分の意志を他人の理性に従わせない習慣を失った者は，自分の理性にも従うことができにくくなり，ここに習慣のおそろしさがみられると指摘して，克己禁欲の訓練を幼少期より開始すべき理由としている。

その方法については「一般のやり方とは逆に，子どもはまだ赤ちゃんの時から，その願望にうち勝ち，欲望が無視されることに慣れなければならない」[4]とし，子どもが欲するからといって親は物を与えてはならないのである。与えられるものは，それが子どもに適し，有益であるからということである。

このことから彼は子どもの意志をすべてみとめていないのではないかと思われるが，そうではなく，子どもの意志を子どもとして取扱い，彼等が好む遊戯は許している。玩具についても欲するものは与えることが必要だとしている。ただ，子どもが幼いからとか，望んでいるからという理由のみで与えることを禁止しているのである。

子どもは，完全に親の意志に従うように最初は教育し，次第に成長してきたら，その取扱いを寛大にして，最良の友人となって，信頼と敬愛の念が育成されるよう指導すべきだと教えている。

これは彼自身の経験から導き出されたものであり，彼の両親がその模範となっていることが推測できる。

彼は，本当に分別ある人でなければ子どもの教育はできないと，道徳的理性的教師論をここに披瀝している。その一端は次の言からも伺い知ることができる。

「すべての人は早晩，自分自身に対して，また自らの行為に対して責任をもたなければならない。また本当に善良な，有徳，有能の人物は内面的にそうでなくてはならない」[5]と。道徳心養成のための実際の訓練については，まず罰することについてふれ，これは害あって益なしということである。

注(4)　Ibid., Sect. 38, p.59.
(5)　Ibid., Sect. 42, p.64.

理由として彼は，教育訓練の方針を，克己禁欲の精神の養成と親及び教師に対する従順並びに敬愛の情の育成におき，一方においては過度の抑圧による意欲の減退，挫折が生じないように配慮しているので，懲罰方法として当時採用されている笞打ち等は，この方針に反し，最も不適当なものであると考えている。

笞打ちの弊害については，現代の体罰に適用することができそうであり，肉体的快楽のみを求め苦痛を避ける心を行動の動機とする点が一つであり，二つには，笞打ちに関係する行為そのものを嫌悪するようになり，無気力で卑屈な人間を造ってしまうことになりかねないわけであるから，賢明で善良な人間を育成する方法では断じてないのである。

褒美についても，過度なものは注意深く避けなければならないとしている。

子どもの意に添ったものを賞品として与えることは，ぜいたくや自慢，欲深さなどを教え込んでしまう危険性が認められるからである。

ただ，快楽については，子どもの健康の面，躾の面から考えて害がないものであれば認めており，両親や教育者との友愛敬愛の結果から与えられたものであればよいのであり，名誉を重んじ，恥辱を感じさせるものは有効であるとしている。[6]

これらの感情が心理上の最高の刺激となり善行に結びつく根拠となるであろうという理由も述べている。

規律についての見解は，従来の学校教育が数多くの規則や条例をもうけて，子どもを指導しようとしたことに批判を加え，子どもの能力を超えるほどの数多くの規律をもうけるべきではないとして，友愛的な忠告の必要や練習を反復した上での実行こそ効果を発揮するものであるとしている。

教育にあたる人は，「子どもの自然性，能力及び体質を観察し，それを試験した上で，要求することが妥当であるかどうかを明らかにして行う」[7] 必要がある。

ロックの認識論的教育論の一端をここに垣間見ることができる。

注(6) Ibid., Sect. 56, p. 75.
(7) Ibid., Sect. 66,

礼儀作法については，内面的謙譲や親切な心を表すものとして大切なものではあるが，外形にのみとらわれた指導は無意味であり，無作法も時がたてば年齢の成長とともに修正されるし，質素にして自然のままの実例によって学ばせるのが良いとしている。無理に子どもに行なわせるようなことは，大人の模倣のみで，虚礼となり，形式的動作に終らせてしまうことになるであろう。[8]

舞踏の練習は姿勢態度を優雅にし，男らしいしっかりした態度を植えつけるし，年上の人々と交際を深めるので粗野な性格を矯正する効果を持つと推奨している。

作法の習得に関しては，友人との交際についても触れ，人間は一種のカメレオンであるから，遊び仲間の選択には最大の注意を払う必要があり，悪感化を避けることを述べ，使用人との接触も，同様の理由から禁止しており[9]，子どもはできるだけ両親たちのつきあいの中におくか両親が委嘱した人々の間におくのがよいとしている。

当時の上流社会の子弟の教育についての意見であるから，現代の考えから比較すると異様な偏見のごとく感じられるが，ロックの唱道する家庭教育中心主義の理論的根拠がここにあり，子どもを広く社会に出して，周囲と接触させることは，子どもを大胆にし，同年代の者との交際及び競争によって活気や努力を生じさせることにはなるが，一般において粗暴さや悪徳が伝染し，道徳的品性や純心な行為を犠牲にすることになる。それゆえに徳性の教育には家庭における教育が最もふさわしいということであろう。

世間でささやかれる家庭教育の欠陥としての臆病，無知ということも，やがて成長して大人と交際するようになると自信も生れてくるので，成長するまで家庭で教育することは遅すぎるということにはならないのである。

だが，家庭教育における教育の効果は，教育するものの方法如何にかかっているから，両親が子どもにまねさせたくないことは，目の前で決してしてはいけないのである。

注(8)　Ibid., Sect. 67,
(9)　Ibid.,

子どもに自分自身を畏敬させ，自分の命令に服従させようと思う親は，自分自身の子どもに対して，充分尊重の態度をとらなければならないということである。

子どもに物事を習得させようと考えるならば彼等にとって重荷と感じさせることなく，押しつけるようなことがあってはならないのである。どんなことでも学ばせようとするときは，子どもの気持がそれに向っていて調子づいている時，換言すれば精神がゆるんでいたり，他のことを考えてぐずぐずしたりする時ではない。

子どもはいつも自由を好み，義務づけられることを嫌う。大人も同様ではあるが，遊びと学習の関係を逆にとらえて応用すると，強制しなくとも効果的に運ぶことを事例を用いて説明している。

ロックは精神の訓練上必要なこととして，子どもの気質の観察を重要視しており，子どもを支配する主な感情や傾向が何であるかを確認することを述べ，彼自身それについて説明を加えている。

子どもが生れつき所有する気質として，支配欲，残忍性，好気心，気まぐれ等があり，支配欲は幼少期から現われ，多くの悪徳の習慣は，この欲望から生じると指摘，それが子どもに現われる場合は，彼等の欲求を他人に服従させようとする時で，泣き叫んだり，気むずかしくする時と認めている。事物を自分のものにしたいという欲望，独占し思いのまま処理することに喜びを感じる子どもの気質を上手に分析している。

このような支配の克服は，幼い時から必要以上のものを持たせない習慣づけにあり，欲しがるものをすぐに与えてはなんにもならないということである。

その他，物惜しみをせずに自由に与えることこそ，尊敬と賞讃を得ることになることを理解させることだとしている。

次にこの支配欲と結びついている泣き叫びについては，忍耐づよく理性の声に従わせる事を説き，苦しみや悲しみからくる泣き叫びには優しい扱いが望ましいとして区別している。

ただ，泣き叫ぶことは，欲望を満足させる能力が子どもにない時に，それを

得ようとして行うのであるから，同情して欲望を満たしてやることは，虚弱な人間をつくる結果を招くとして厳しく戒めている。[10]

残忍性については，成長してからも友人に対して同情心や親切心を感じないようになり人類の平和にとっても大きな障碍となるので，早いうちから子どもの心に親切と同情の心を植えつけ，弱い者，目下の者，使用人に対して，言葉づかいや振舞について礼儀正しく行えるよう習慣づける必要を説いている。[11]

子どもの好奇心と気まぐれについては，好奇心は真理を求める傾向として尊重しており，正しい方向へのばす必要があるとし，気まぐれについては，指導の不適切が原因となっていることを述べ，それによると，子どもは本来，気まぐれな存在ではないから，興味あることを徹底的に行わせ，次第にその方法を転化させて矯正してゆくべきであり，もし，この方法でも効果があがらない場合には，いつも筋肉運動に従事させて連続して物事を行う習慣を養い，次第にこの習慣を精神的な方面に転換させる方法をあげている。

ロックは，徳育論の最後に，徳性の根拠として，幼少期より神への正しい観念を刻印すべきこと，最高の存在への愛と敬虔の念を浸透させねばならないとしている。[12]

「子どもに，神への祈りをささげる習慣をつけさせて，神への正しい観念のうちに徳性の根拠ができ上ったならば，次に注意すべきことは，いつも正確に真実を話させるようにし，考えうるあらゆる手段をつくして，彼が好意ある性質をもつようにすることである。」と……。更に続けて「他人を愛し，他人に好意を示すことは，立派な人物の真の礎を築くことであり，あらゆる不正は，一般には自分自身をあまりに愛しすぎ，他人への愛が足りない所より起るものだ，ということを教えなければならない」[13] と結論づけている。

以上に述べたように，ロックの徳育論（精神の健康について）は，家庭教育

注(10) Ibid., Sect. 111,

(11) Ibid., Sect. 117, p. 195.

(12) Ibid., Sect. 136, p. 222.

(13) Ibid., Sect. 139, p. 226.

の重要な任務としての考察であり，幼少期より訓練によって，悟性の指導のままに導かれる人間を育成することを基本としているようである。

従来までの躾の方法と異なり，子どもの自由を尊重すると共に，他方では抑圧，禁止している面もあり，実際の生活でのこの理論の活用は，教育に携わる人の理性的判断にかかっているといっても過言ではなかろう。

4. 学習の方法について　―知育論―

ロックの意図する人間像は，精神諸能力の訓練によって悟性の正しい使用をなす理性的人間である。これは前記した紳士の条件の価値序列においても，「徳性の完成」を最初においていることからも明らかである。

だが，しかし，学問特に知識の獲得は最後におかれ，知恵とも区別されて実際生活上の手段として軽視されている。

このことは，当時の学校教育への批判から生れたものであろうし，学問特に知識が，実用性に乏しく，虚飾的な役目を果していたからであろう。

「私が学習という問題を最後にもってきたことを，また特に私がこれを教育のうちで最も小さい事と考えていると云えば，恐らく人はびっくりするだろう」[1] と彼自身も正直に告白している。

しかし，決して読み書きの能力や一般的知識の修得を排除しようというのでなく，「大学者であるよりも高潔な人，あるいは賢人であることをはるかに高く評価」[2] するためであり，精神が正しくない者は，学識によってかえって愚劣な或は悪い人になることがあり得るためである。

知識は，他の一層重要な諸性質を助長させる手段として獲得すべきであるとしている。

ロックが述べている事の大半は，学習方法の問題であり，それも学校教育

注(1) J. Locke ; Some Thoughs concerning Education : Sect. 147,
押村襄『教育に関する考察』p. 243.
(2) Ibib., Sect. 147, p. 244.

（当時の）の方法より安価な代償によって修得させようと試みているのである。

「学問の目的は知識を獲得することであり，知識の目的は実践ないしコミュニケーションにある」[3] と実生活に役立つ方法論である。

まず読み方の学習から入り，続いて書き方，図画の練習，外国語，ラテン語と順を追い，地理，天文，歴史，幾何等の科学の分野の習得，最後は文法で終っている。

読み方の学習では，幼児が話しはじめる時期から取りかかるべきだとして，それには課せられた仕事と思わせることなく，反対に名誉，信用，喜び，気晴しの事柄と思わせ，子どもたちから進んで教えを乞うようにしなければならないとしている。

子どもの学習に最も適した時期は「子どもの心がそれに向っている時」[4] であり，いかに両親や教師が懸命になっても，子どもがその気持にならなければ効果はあがらないと説き，遊戯の例を取りあげて，楽しく自由な気持で行なわれる遊戯と結合させている。

具体的な方法として玩具の使用を推奨して文字を憶えさせようとしている。[5]

文字を憶えたならば語を教え，労せずして読み方が習得できるということである。

このような考え及び行い方は，暗誦に頼っていた当時の教育方法に新風を吹き込んだといえる。

読み方が上達したならば，次には書物を選んで読ませることとして，彼は「イソップ物語」を推奨している。[6] それが絵入りのものであればなおよく，絵によって知識も増え，何らかの観念も得られた上に，一人で読み進んでゆくで

注(3)　Ibid.,
(4)　Ibid., Sect. 148,
(5)　Ibid., Sect. 150,　サイコロを使っての文字遊びの活用，原著には Royal-oak lottery とある。
(6)　Ibid., 156,

あろうと，感覚的直観主義にもとづく悟性認識の理論が，ここにもあらわれている。

「レイナード狐物語」[7] も同様の理由から二番目にあげており，「聖書」については，その中の重要な部分を暗誦するのが良いと考えている。

読み方の次は書き方で，ペンの持ち方が正しく覚えられたら，紙の置き方，腕及び身体の位置をきめて良い姿勢を学ばせ，赤インクで文字を書いた上を黒インクで筆順を教えながら習得させていく方法を述べている。[8]

文字の練習に熟達したら，今度は図画の練習に入り，建物や機械等を描かせる事によってしっかりした観念を植えつけ，事物を正しく認識させることに役立たせるとしている。[9]

実に論理的な方法であり，子どもの成長を正しく把握して，それに適した方法ということができる。

外国語の学習については，母国語が話せるようになってから学ぶべきだとして，フランス語とラテン語を考えている。

フランス語の習得に関しては，文法上の規則をもってせず会話による方法を採用している。

「幼少期においては，発声器官が柔軟であるから，正しい発音に慣れることができるが，年をとってからでは困難になる」[10] といっている。

ラテン語の学習も同様な方法で習得すべきことを述べている。子どもを文法で苦しめることなく習得させるには，ラテン語を良く話す人を探し出し，その人が絶えず子どもに話をしてやるのが正しい方法なのである。

もし，このような人が得られない場合には次善の策として，対訳の「イソップ物語」のような面白い書物を利用し，毎日何回も繰返し読ませ，完全に理解するように導き，復習して覚えたことを忘れさせないようにさせることであ

注(7) Ibid., 156, p. 353. 『Reynard the Fox』ドイツに伝わった動物寓意詩『ライネケ狐』(Reineke Fuchs)
(8) Ibid., 160, p. 254.
(9) Ibid., 161,
(10) Ibid., 162, p. 259.

る。そして文字が書けるようになれば，それを書き写させるのが良いと，考えている。[11]

なお，この学習において，ロックは次の点に注意すべきだとしている。

① 子どもが注意を集中しておれば，気楽にさせ，できるだけ愉快にさせておくこと。

② 文法の研究も必要なことではあるが，それは大人のやる仕事であり，本当に正確に学ばなければならないのは，母国語であるということ。[12]

ロックの学校時代の外国語教育の厳しさ，苦しさの中から導き出された教訓が，当時としては画期的な方法で述べられている。これは現代日本の外国語教育に反省をうながす言葉として受けとめても良いのではなかろうか。

彼の学習論の最初は言語に関するものであったが，続いて諸科学について述べており，算数，地理，年代記，歴史及び幾何は，学習のための必要な教科であり，フランス語，ラテン語を教える時に関連させて教えてゆけば効果的であるとしている。

地理については，地図及び地球儀を使って，地球の形状，大陸の位置や境界それぞれの国の地方の位置や境界等を学ぶことから始めている。地理についての一般的な知識が身についたら算数を学習させるのがよいとして「算数とは，もっとも易しい第一種の推理であって，人間の精神が普通一般に有しあるいは慣れてしまうものである」[13] といっている。

抽象的悟性活動の最も容易なものであって人生のあらゆる分野に価値をもち，これを使わない事には，何事もなすことができないという考えから来たものであろう。

算数ができるようになったら，地理の知識を深めてゆき，天球儀によって天文学の勉強をさせ，惑星の位置や太陽からの距離，運行とその理論等を自然に理解させ，ユークリッドの幾何学の勉強に入らせるのが順序として良いとして

注(11) Ibid., 167,

(12) Ibid., 168,

(13) Ibid., 180, p. 290.

いる。[14]

年代記は，時代の全体の流れをつかみ，見通しをたて，歴史上の重要な時期について知らせることになるので，地理と共に歴史に関する知識を明らかにするのに役立つと，地歴併行学習上に意味をもたせている。

特に歴史については，多くの事項を教えながら楽しく学習できる点から重要視しており，歴史を学ぶものは，社会における人間生活の起源や目的を知ることになり，個人の任務を明らかにすることができるし，法律制度が生れた国の背景も知って，現代におけるその価値を理解することをもでき，思慮を深める結果を導くのである。

法律については，正と不正の真の基準を追求する学問として，如何なる地位につく者も無知であってはいけないとしている。[15]

修辞学，論理学については，以前までは文法についで重要視されていた学問であるけれども，彼は，子どもにとっては価値少い学科として，形式にこだわることを戒めている。

自然の思想にもとづいて明瞭に秩序正しく発表できるように教えることを適応として，自然哲学を，物の本質，性質及び作用を明らかにするものであって心霊に関する形而上学と物体に関する物理学とに分け，教科としてはまず形而上学をあげ，聖書により，心霊の発現を認めさせ，思想の物質的傾向になることを防ぐ必要があるとしている。

物理については，ニュートンの大発見等にもとづき物体の現象を明らかにするよう努力すべきであることを述べている。

「比類なきニュートン氏は，自然のある分野に適用された数字というものが事物が証明する諸原理によって，いかに深く，われわれをある種の知識，私がいうところのとらえがたい宇宙の驚異に関する知識の中にまで導き入れるかということを示されている。」[16] と述べていることからでも明らかである。

注(14) Ibid., 180, p.p. 291—292.

(15) Ibid., 187,

(16) Ibid., 194, p. 310.

ギリシャ語については，価値がないとは考えてはいないが，将来の学者，専門的に研究する人が習得すべきものであって，彼の言う普通の紳士の教育においては必要不可欠なものではないとしている。

これら諸科学の学習は，最良の方法で教えられる必要があり，その方法は，一定の順序に従って，一度に多くを授けることはつつしみ，既習のものを銘記させ，学習したことは人に伝えて，理解を深めさせる方法を説いている。

学習の進歩というものは，はじめにある場所から，それに隣接し結合した場所へ進むことであり，悟性において獲得された知識からそれに隣接し続く知識へ進むことであると，[17] 学習のプログラムやカリキュラムの原理となるべき提言で終えている。

5. 諸芸一般について　―技能論―

ロックは，諸科学の他に，紳士教育の中で必要な技能として，舞踏，音楽，乗馬，フェンシング等をあげ，それらについての説明を加えると共に，当時としては大変珍しい作業や商業簿記についても触れ，最後に旅行について論じている。

まず舞踏（ダンス）は，前にも少し述べたが，作法上正しい姿勢を養うもの子どもに自信をうえつけるものとして推奨しているが，但し条件つきで「必ずすぐれた教師を，つまり優雅とかふさわしいとはどういうことか，身体のあらゆる動作をのびのびさせるものは何か，等について教授しうる立派な教師をたのまなくてはならない」[1] とし，これらの本質を理解しない人であるならば，教わらない方がむしろよく，自然のままの方がはるかに上等であるとのべている。

注(17)　Ibid.，195，p. 316.

(1)　J. Locke；Some Thoughs concerning Education：Sect. 196，押村襄『教育に関する考察』p. 317.

音楽については，舞踏との関係において大切なものであるが，普通の演奏技能を習得するだけでも相当の時間を費し，一寸変わった友人とも交際することになりかねないので技能の中では最下位におき，積極的には勧めていない。[2]

乗馬については，健康のためにも大変良いものであり，運動としても適当なものであるので，生活の豊かな人々が習う分にはよろしいが，さほど重要視はしていなく，両親や教師に判断をゆだねてしまっている。

フェンシングについては，健康上有益であるが，これも生命の危険[3]を伴うものであるから，乗馬と同様，紳士の資格，たしなみ程度にとどめている。彼の個人的見解では，フェンシングよりは，レスリングで強くさせたいと言っている程である。

フェンシングと乗馬は，紳士の教育には，不可欠というのが当時の一般的な考え方であったので，上流階級からこれらのものをすべて取り上げるのは困難であることを彼は考慮して，この著作の中に入れているが，一般の市民としての生活には，これらはほとんど役に立っていない事を，彼はすでに認めていたのである。[4]

だから，より実利的なものとして，休養の目的をもって行う「作業(手仕事)」等を次に紹介している。「紳士の教育には似つかわしくなく，関係のないようであるが」[5]と前置をしながら……。

いつも動き廻る子どもたちに，役に立ちそうなことを教える提案は実学主義としての彼の面目躍如たるものであり，絵画，旋盤，園芸，粘土細工，鉄工等についての技術的熟練をあげている。学習からの解放や気ばらし更には戸外で

注(2) Ibid., Sect. 197, p.318.

(3) Ibid., Sect. 199, p.320. 「青年は若い血に燃えているので血闘をして熟練の腕前と勇気をと示し，正当性の主張を守ろうとする。だから，フェンシングは喧嘩の種になりやすく悲劇の原因をつくる。多くの母親の流した涙が実証している。」と指摘している。

(4) Ibid., Sect. 199, p.320. 「剣術（フェンシング）とか大きい馬に乗るということが紳士の教育に必要な事項であるという考えは非常に一般的であるから，そうした身分の人々から，他と区別する特徴を全くとりあげてしまうことは困難かも知れない。」（傍点は筆者が記す）

(5) Ibid., Sect. 201

の作業という事で，心身の増進も兼ねている。

子どもたちのみならず，大人に対しても，地方に住む紳士には園芸，農耕一般，更には大工，指物師，細工師のように木材を取扱う仕事をレクリエーションとしてふさわしいとすすめている。(6)

理由としては，身体を動かし精神を休養し，作業そのものに価値を見い出すようになり，生活及び人生に関して正しい判断を修得させることになるからである。

商業簿記については，「紳士が財産を築きあげるために直接役に立つ学問であるとは思われないが，彼が現在所有している財産を維持させるためには，これ位役に立つ効験顕著なものは他にないであろう。」(7) と述べて，良家の子弟の学ぶべきこと，両親は実地にこれを行なわせる必要があると説いている。

家政の概要を把握させたり，財産の維持について理解させるだけでなく，習慣を養い，整理する精神を高揚させる上からも効果が大きいとしている。

最後に旅行についてとりあげ，普通は教育の後期において必要なものであり紳士教育の仕上げであるが，外国旅行は，16才ないし21才の間はまだ早すぎるとしている。(8)

理由は，言葉を学ぶには遅すぎるし，ちがった社会の習慣，生活形態等に接して思慮分別を練るには早すぎるからである。

旅行についての彼の意見は比較的幼い時期に教師の監督の下で行なわせるか又は成長して自分の責任で，自分の力で観察し，行動する力が養成された時に行わせるのが適当であるとしている。

「一人前になった青年紳士ならば，異邦人として，その土地の習慣，作法，法制及び政治等について教示して欲しいという希望を伝えれば，彼はいたるところの土地に，最高の立派なまたは知識豊かな人々の中に好意ある教師と好遇とを見出すだろう。この人々は，この素直な知識欲旺盛な異国の青年を快く迎

注(6)　Ibid., Sect. 204,

(7)　Ibid., Sect. 210, p. 331,.

(8)　Ibid., Sect. 212,

え励まし，援助してくれるにちがいない」[9] と非常に楽観的に語っている。

以上，4つの部門に分けて彼の教育に対する見解を綴ってきたが，基本的には人間のもつ粗野で生々しい自然性に対する人間悟性（知性）の優位を説くものであり，身体と精神の鍛練の中より「自然性」と「法則性」（規則性）の調和を考え，学習方法論並びに諸芸一般の項では，子どもの「自由」と「抑制力」の調和を説き，教育論全体を通してながめた場合は，彼が一部で紳士教育に固執しているように「優雅「（gracefulness）が彼の教育の中心目標になっているといっても過言ではないようである。

完璧な優雅というものは，技巧に走ったり，不器用に無理にまねたものの中からは生じないし，良き指導者の適切な習慣づけ（訓練）の結果より得られるものであり，優しい精神やよい教育をうけた性向の自然の発露なのであって，自然のもとに備っている筈の「美」である。外部に現われる行動と内的な精神との調和なのである。[10]

優雅を表す精神の傾向として，情けぶかく（humane）友情ある（friendly）礼儀正しく上品な気質（civiltemper）をあげ，対概念として，下品な（low）心の狭い（narrow）ごう慢で横柄な（haughty）そして無礼な（insolent）汚れたもの（blemished）をあげ対比させている。[11]

知性の光に照して感性を理性まで純化する教育，それが啓蒙思想家として彼のめざす新しい秩序ある教育であり，調和の教育は自然の中に知性の秩序を築くことに他ならないのではなかろうか。

注(9) Ibid., Sect. 214, p. 338.

(10) Ibid., Sect. 66, p.p.88—89.

(11) Ibid.,